

栽培漁業化技術開発事業（平成10年度）

ヨ シ エ ビ

南 勝 人・藤 原 正 嗣・水 野 知 巳

目 的

栽培漁業の推進による沿岸漁業の振興を図るため、県栽培センターでアワビ、クルマエビ、ヒラメ、トラフグ、マダイの種苗を生産しているが、新しい魚種として定着性の強いカサゴ、ヨシエビの栽培漁業化への要望が強い。特に伊勢湾内の漁業者の間では成熟すると湾外に出てしまうクルマエビよりも、定着性が高いと考えられているヨシエビに地元の期待が寄せられている。平成6年に設定された第3次県栽培漁業基本計画でも、目標年度である平成11年度にカサゴ5万尾、ヨシエビ100万尾の放流目標が設定されている。そこで、伊勢湾におけるヨシエビ稚エビの分布実態と親エビの漁獲実態、および親エビの成熟度の経時変化を明らかにすることにより、ヨシエビの栽培技術開発に寄与する。

方 法

1. 標本船調査

操業日誌の記帳を鈴鹿市の底曳網漁業者（若松）に依頼し、漁場、漁獲量等について調査した。

2. 市場調査

採卵用の親エビの成熟状況を調査することを目的に市場（磯津漁協）に水揚げされたヨシエビの体長および雌の成熟度を調査した。雌の成熟度の測定にはクルマエビの選別方法を用いていた。また、これと平行して漁場、漁獲量等について聞き取り調査を行った。

3. 天然稚エビの分布状況の調査

稚エビの分布を調査するため、平成10年11月、12月、平成11年1月に底引き網による漁獲調査を行った。調査は備船した底引き網漁船により、磯津沖、四日市港沖および長島沖を15分間操業することによって行い、漁獲されたヨシエビの体長を計測した。

結 果

1. 標本船調査（鈴鹿市漁協若松支所）

4月～5月はほとんど漁獲は無かったが、6月下旬より白子沖を中心に1日に一艘あたり10～30尾程度水揚げされるようになった。7月4日に3kgと7月上旬に1日

一艘あたり50～100尾前後の漁獲とピークを迎えた。この後漁場を常滑～野間沖に変えて10月いっぱいまで1日一艘あたり20尾前後の水揚げが続いた。11月～2月には四日市沖付近を中心に、1日一艘あたり10～15kgの漁獲がみられるようになった。漁獲サイズは6月は10cm前後であったほかは、漁期を通じて10～14cmであった。

2. 市場調査（四日市市漁協）

市場に6月5日、25日、7月1日に水揚げされたヨシエビの体長と成熟度を調査した。この時のヨシエビの平均体長は132mmであった（図1）。雌の成熟度をクルマエビの選別方法を用いて測定した結果、6月5日時点では成熟している個体はほとんどみられなかったが、6月25日には成熟した個体が40%に達した（図2）。これら成熟しており、その全てが採卵に使える状態であった。

3. 天然稚エビの分布状況の調査

今回の調査では稚エビを漁獲することはできなかったが、11月の調査で70～90mmの幼エビが木曾三川沿岸までの広い範囲で生息が確認されたものの、12月の調査では木曾三川沿岸域では漁獲されなくなり、1月には四日市沖合でのみ漁獲された。調査時の漁獲量も11月～1月にかけて減少する傾向を見せた。

考 察

平成10年度の標本船調査の結果、ヨシエビは11月下旬から2月に一艘あたり15kg前後のまとまった漁獲があった。去年のこの時期の漁獲が20尾前後であったことからすると非常に多い数字であった。この時の漁場は四日市港沖付近であった。また、6月下旬から7月上旬にかけては白子沖付近で漁獲されていたが、7月中旬から10月いっぱい常滑～野間沖で漁獲された。

このように、ヨシエビの漁場は春期および秋・冬期には四日市沖を中心とし、夏期には常滑～野間沖が中心となっている。このパターンはこの3年間の標本調査で共通している。

また、放流サイズのヨシエビの分布を調査しようとしたが、稚エビを漁獲することはできなかった。木曾三川河口部の調査も調査対象としたかったが、ゴミが多く

底引き網で操業することは非常に難しいため断念した。
この点について手法を改善することにより、10月～11月

に木曾三川河口部の調査を行う必要があると考えられる。

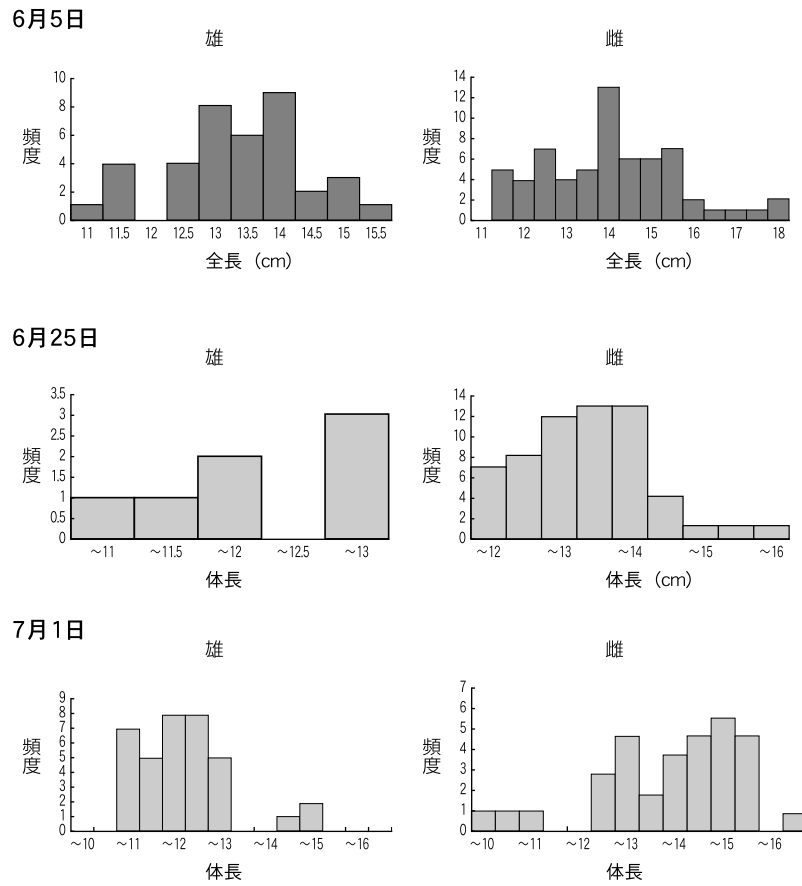


図1 四日市漁協（磯津）で漁獲されたヨシエビの体長組成

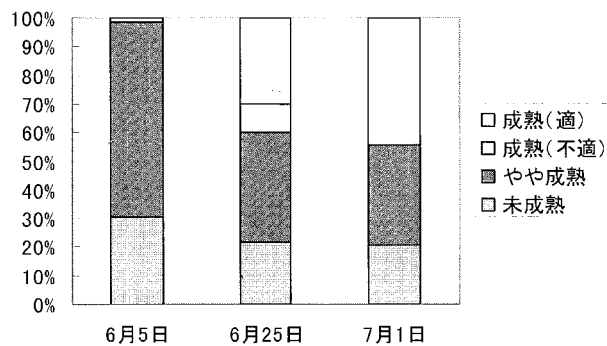


図2 四日市漁協（磯津）で漁獲されたヨシエビの成熟度の推移